

□海外文献紹介□

無症状肝細胞癌の発育速度とその臨床的含意

Growth rate of asymptomatic hepatocellular carcinoma and its clinical implications : *Sheu J-C, Sung J-L, et al* (Gastroenterology 89: 259-266, 1985)

肝細胞癌の発育速度は、その自然経過を明らかにし、治療効果や予後を評価するのに重要である。著者らが2年間にスクリーニング検査で発見した無症状肝細胞癌100例のうち少なくとも1か月以上の間隔で2回以上超音波検査が行われ、腫瘍が明瞭に描出され、腫瘍は類円形、抗癌治療は未施行の4条件を満足した28例(平均年齢56歳)、31腫瘍について、発育速度を超音波検査により36~860日、平均238日間追跡した。31腫瘍は、初め径1.1~4.1cm(平均2.3cm)で最終的に径1.2~8.7cm(平均3.9cm)となった。なお腫瘍11個は切除、10個は針生検、3個は細胞診、7個はAFP値、血

管造影、CT検査により肝細胞癌と診断された。3回以上大きさを測定しえた17腫瘍のうち、追跡中縮小を認めた2腫瘍を除く15腫瘍の対数発育曲線は、ほぼ直線になった。

この結果に基づいて、発見時と比較して最終的に縮小した1腫瘍を除いた30腫瘍のダブリングタイムを算出すると、29~398日、幾何学平均値で110日であり、Shackneyらの報告した肺癌、大腸癌、進行乳癌と同じ、発育速度の遅い群に属した。発育速度と予後との関連について、乳癌では相関が認められるが、肝細胞癌ではまだ経過観察期間が短いので不明である。また前述の17腫瘍の各々について発育速度を検討すると、9腫瘍は指数加速、7腫瘍は追跡後期に減速(2腫瘍は縮小)、1腫瘍は追跡初期に静止しその後加速した。発育速度の減少は恐らく腫瘍の自然壊死によると思われる。ダブリングタイムは年齢、性、HBs抗原、腫瘍の存在部位、肝機能検査、肝硬変の重症度分類(Child分類)、腫瘍

の組織型や悪性度とは相関しなかったが、発見時の腫瘍径と相関し、腫瘍が大きいほど、ダブリングタイムが長かった。これは、大きな腫瘍では既に発育速度が減少しているためであろうか。発見時のAFP値と発育速度はよく相関しなかったが、経過中AFP値が指数的に増加した14例では、AFP値と腫瘍のダブリングタイムは相関した。

以上の結果、肝細胞癌の準臨床的期間、すなわち超音波検査やCT検査で検出できる径1cmから臨床症状の出現する径10cmまでの発育期間は外挿法により9.6か月~10.9年、平均3.2年と推測され、その早期発見のための適切なスクリーニング間隔は、最も発育の速い腫瘍が径1cmから径3cmになるのに4.6か月かかるので、根治切除の期待できる径3cm以下で発見するためには4~5か月となる。

(愛知県がんセンター第1内科

種広健治 抄)